

子育てサークル支援と子育て環境の関連性

—地域子育て支援拠点利用者調査を通して—

関西福祉科学大学 新川泰弘 (会員番号 05077)

キーワード : 地域子育て支援拠点、子育てサークル、子育て環境

1. 研究目的

現在、地域子育て支援拠点において子育てをしている親の孤立化を予防する支援や子育てで不安やストレスを軽減させる相談援助などさまざまな実践が行われているものの、柏女ら(2000)の調査によって地域子育て支援拠点で特に力を入れている活動が「育児グループ・サークル活動の運営」であることが明らかにされている。そこで、地域子育て支援拠点を利用する子育て家庭に対して地域子育て支援拠点で特に力を入れている子育てサークル支援をどのように展開していくか探るため、地域子育て支援拠点利用者の子育て環境因子と子育てサークル所属の有無との関連性について検討することを研究目的とした。

2. 研究の視点および方法

A 県の地域子育て支援 20 拠点を対象とし、調査協力を得た地域子育て支援拠点を運営する市町の児童福祉課長及び施設長、社会福祉法人理事長及び施設長へ調査開始前に調査目的の説明を行い、了解を得た後に担当者へ調査目的と内容の説明を行った。なお、調査方法は留め置き法を用いて、利用者からの問い合わせに関しては実践者の協力を得て適宜説明を行った。地域子育て支援拠点利用者の子育て環境に関する質問紙作成にあたり、さまざまな調査結果に基づいて研究開発された芝野(2002)による GPT 実践モデルを参照し、子育て環境に関する質問紙の叩き台を施設長、園長、職員とのグループ協議を複数回繰り返して作成した。その後、新川(2008)の予備調査を経て質問項目を修正した。地域子育て支援拠点利用者の性別と年齢、子育てサークルへの所属の有無、子どもの性別と年齢、地域子育て支援拠点利用頻度といった基本的属性と子育て環境(22 項目)について調査した。また、子育て環境はあてはまるからあてはまらないまでの 5 件法を採用し、結果の集計及び統計分析においては、PASW statistics 17.0 を用いた。

3. 倫理的配慮

本調査にあたっては調査研究の目的と趣旨を説明するとともに、個人のプライバシーがもれないように調査結果をすべて統計処理することを活用することをあらかじめ伝えた後に同意を得て協力いただいた。

4. 研究結果

調査対象は地域子育て支援拠点利用者 813 名。育児サークル所属の有無は、所属しているが 186 名(23.6)、所属していないが 603 名(76.4%)。利用者の年齢は平均値 33.53 才(標準偏差 4.516)。利用者の末子の平均年齢は、1 歳 9 ヶ月。利用者の利用頻度は、3.57 回/年(標

準偏差 1.63)。子育て環境尺度 22 項目に対して主因子法・斜交回転(Promax 回転)による因子分析を行った。その結果、第 1 因子「子どもの育ちを育む親子遊び」、第 2 因子「子育ての仲間作りと情報収集」、第 3 因子「子どもの気持ちを考慮した関わり」、第 4 因子「子育ての不安とストレス」と命名した($\alpha=.76\sim.84$)。子育て環境の下位尺度間相関から、「子育ての仲間作りと情報収集」と「子どもの育ちを育む親子遊び」の下位尺度には有意な正の相関がみられ、「子どもの気持ちを考慮した関わり」と「子どもの育ちを育む親子遊び」及び「子育ての仲間作りと情報収集」の下位尺度にも有意な正の相関がみられた。また、「子育て不安とストレス」と「子どもの育ちを育む親子遊び」及び「子育ての仲間作りと情報収集」の下位尺度には有意な負の相関がみられた。子育てサークルへの所属の差の検討を行うにあたり、群分けされた子育てサークルへの所属有群と所属なし群に対して、子育て環境の各下位尺度得点について t 検定を行った。その結果、子どもの気持ちを考慮した関わり($t(758)=2.35, p<.05$)については、子育てサークルへ所属している人の方が子育てサークルへ所属していない人よりも有意に高い得点を示していた。しかし、それ以外の子育て環境項目については子育てサークルへの所属の得点差は有意ではなかった。また、子育てサークルへの所属の子育て環境下位尺度間の相関係数は、子育てサークルへ所属していない人では、「子どもの育ちを育む親子遊び」が、「子どもの気持ちを考慮した関わり」との間に有意な正の相関を示し、「子育て不安とストレス」との間に有意な負の相関を示した。また、子育てサークルへ所属している人では、「子どもの育ちを育む親子遊び」が、「子育ての仲間作りと情報収集」及び「子どもの気持ちを考慮した関わり」と有意な正の相関を示し、「子育て不安とストレス」との間に有意な負の相関を示した。

5. 考察

子育てサークルへ所属している人の方が子育てサークルへ所属していない人よりも「子どもの気持ちを考慮した関わり」を行っており、「子どもの気持ちを考慮した関わり」は、「子どもの育ちを育む親子遊び」と関係して行われていることが明らかになった。また、「子どもの育ちを育む親子遊び」は、「子育ての仲間作りと情報収集」や「子育て不安とストレス」とも関連していることがわかった。なお、「子どもの気持ちを考慮した関わり」は、さまざまな要因と関係しているものと思われるため、「子どもの気持ちを考慮した関わり」と関係している要因についても引き続き検討していくことが今後の研究課題となった。また、地域子育て支援拠点を利用する子どもと子育て家庭の子育てニーズに対応するファミリーソーシャルワーク実践教育を新たに創り出していくために、今後、本研究でその必要性が示唆された「子育てを育む親子遊び」と「子育ての仲間作りと情報収集」を取り入れた「子どもの気持ちを考慮した関わり」を促進させる子育てサークル支援を実践現場で試行し、実践の効果測定に取り組んでいきたい。

なお、本研究は文部科学省科学研究費(若手研究 B)(課題番号 20730394)による研究成果の一部である。